令和８年６月１日　*vol. 8*

「恩を返す、恩を送る」

県立神戸高等学校長
新谷　浩一

○　同窓会館にて

先月のとある土曜日、私は本校敷地の南側に立つ同窓会館にいました。兵庫県立神戸高等学校同窓会の定時社員総会です。

この同窓会は同窓生（高校卒業後の皆さんの姿でもあります）から寄付を募り、それを資金として本校の活動を支援していただける組織です。特に本校の英国、シンガポールの姉妹校との相互交流については支援なしでは実施が難しい面もあるため、お礼とともにその成果を同窓生の皆さんにお伝えする時間をいただいたのです。

英国研修班からは放課後まっすぐに帰宅し、家族と６時間ぐらいをかけて語らいながら、夕食をとる英国の高校生の姿に、自分たちの日常との違いを感じたという話もありました。家族とともに過ごす時間を大切にしている国なのですね。「世界の見方が変わりました」との感想は実に印象深いものでした。

また、自ら進んで家事に取り組む姿が刺激になった、との言葉もありました「凝り固まった価値観から脱却する機会をいただき、ありがとうございました」との感謝の言葉は重たいですね。別れの時はただただ涙に暮れてしまい、「言葉の壁を超えた瞬間だった」との言葉も決して大げさなものには聞こえませんでした。

また、シンガポール研修班からは出向いた交流では「異なる文化に触れ、あらためて日本文化について考える契機」となり、お招きした交流では繁戸先生のお蔭で実現した共同でのロケット製作が互いの心に残った、とのこと。シンガポールには手持ち花火は存在しないそうです。文化が多種多様であることをあらためて知り、「文化的・科学的に成長した」との感想は実感そのもので、集まられた先輩方から大きな拍手をいただきました。

同窓生の方々へはもちろん、昨年度に研修を引率してくださった首藤先生、星野先生、井上先生、ロー先生にも感謝の念が伝えられたと思います。ちなみにこの日の私の役割は神戸高校の現況をお話しすること。現在 1072 名の生徒が通っていることや部活動の活躍ぶり、78 回生が底力を見せてくれた大学進学状況、そして多くの中学生が志願してくれた今年度入試の話などをさせてもらいました。桑田先生がその場におられましたので、「山岳部の全国総体が但馬開催なので男女揃っての出場が期待されています」という話もしました。

恩を返す、とても素敵な言葉です。ちょうど、その１週間前の私は両親の墓前にいました。父の３回忌でした。父の死に触れた過去の通信を添えておきますので、時間があれば読んでくれると嬉しいです。それは将来、皆さんが辿る道と重なるかもしれないですからね。ちなみに介護状態となった両親の介護に精いっぱい取り組んだ私は、両親に「生み、育ててくれた恩を返した」との実感があります。

とは言え、かつて一度、娘が口にした言葉を私は忘れられないでいます。まだ幼かった娘が「父さんは私の誕生日にはいつもいないから…」と友達に言っているのを偶然、聴いてしまったのです。娘の誕生日は祝日の翌日。２日間を利用して遠距離介護をするために、私は常に家を不在にしていたのですね。「淋しい思いをさせていたんだな…」との深い後悔と、「私には言わないでいてくれたんだな…」との健気な優しさへの感謝から、翌年以降の娘の誕生日は家を空けないようにしました。私なりのせめてもの罪滅ぼしでした。

先日、ある方から教わりました。「私は子育てのため、ともに働く方々にとても助けていただきました。その方々に『恩返し』はできませんが、私が助ける側になることは可能です。だから私は自分の経験を次の世代に語り、相談されやすい人になりたいのです。いわゆる『恩送り』です」　恩を送れる人になりたいですね。

令和６年５月２７日　*vol. 7*

「聴かせていただき、ありがとうございます」

県立加古川東高等学校長
新谷　浩一

○　職員室の先生方の面談が終わりました。ありがとうございました。

60 人の先生方からお話を聴かせていただきました。随分と学校から離れていた私にとっては「どんな思いをもって授業をしているか」「生徒にどのような期待をもって部活動指導をしているか」「生徒が安心できる居場所となるよう、担任として何を心がけているのか」という話はとても温かくて、心に染み入りました。やっぱり先生って素敵な仕事だな、改めてそう思った私です。

一方、うまく言葉をおかえしできなくなるお話もありました。その多くはご自身の心身の健康状態についてのお話と、ご家族の介護に関わるお話です。ともに自分の思い 1 つでどうにかなる話ではないですし、解決策がなかなか見つけにくい話でもあります。そこで、今回は後者の方のお話を。

長年の介護が必要だったお母様をお見送りになられた先生からは「心配事が１つ減りました」というお話を聴かせていただきました。心の中の澱のように、家族が要介護状態となると 24 時間心配は絶えないですもんね。そのお声から、そのお顔から深い安堵感が伝わってきました。

もうひとつ。２年前にやはり要介護状態であったお母様をお見送りになられた先生からは「母は私に『生き方』に加えて、最後に『人の死にいき方』を教えてくれました」というお話をお聴きしました。この話も胸を打ちました。これまでそんなふうに思えたことが私には１度もなかったからです。

○　私にとっての家族の介護。

私にとっての介護は８年半前に始まりました。それまでの私は盆暮れを含めて年に数回、埼玉県の実家に帰省していました。しかし、人事担当をしていた平成 27 年、私は多忙を理由に半年ほど実家に寄りついていませんでした。そんな 11 月のある夜、母から泣き声の電話がありました。異変を感じた私はとりあえず夜行バスに乗り、一路関東へ。明くる朝、知らぬ間に荒れ果ててしまった実家を目にします。

母はすでに家事ができなくなっていました。風呂にも随分と入っていないようでした。父はそんな母を強く責めてばかりいました。私はとりあえず母を風呂に入れ、病院に連れて行きました。認知症でした。区役所等をまわり、要介護認定をしてもらい、デイサービスに支援してもらえるよう環境を整えました。遠方に住む私には日常の世話ができないからです。

当初は父も母の病状を理解し、献身的に母の日常を支えてくれました。しかし、老老介護というのは精神的にも肉体的にも実に厳しいものなのですね。月に２度ほど帰省する息子の助けを借りながらも、母が施設にお世話になることに反対し続けて世話をしていた父でしたが、１年ほどで音を上げました。

そこからは施設探しです。仕事柄、２日続けて不在にすることはできませんから、夜行バスを用いて月に何度も帰省しました。仕事を終えたら夜行バスに乗り込み、翌日は通院介助と施設見学に走り回り、再び夜行バスに乗る、そんなとんぼ返りの末、雰囲気の良いグループホームを見つけることができました。そして、そこで母はお世話になることになりました。

「これで母の日常は安心だな」そう思ったのも束の間、安堵感からかそれまで介護する側だった父が認知症になります。その状態での１人暮らしはとても心配だったのですが、アルコール類が好きでたまらない父にとって、施設入所は人生最大の楽しみを奪われることに他なりません。頑なに拒まれました。

そこで私の遠距離介護第２章が始まります。とりあえず自転車が漕げる父にとっては、ご飯を炊きさえすれば惣菜を買って来て食事はできます。洗濯機も回せます。それなりに生活はできていました。

それでも次第に自転車で迷子になったり、転んで救急車に運ばれたり、といったエピソードが生まれ始めます。休みがとれそうな日を見つけては仕事帰りに夜行バスに乗り込み、通院介助や食材ストックづくりをし、日用品の買い出しなどをしたら夜行バスで戻ってくる、そんな日常が始まります。振り返るとトータル６年間、そんなことをしていました。

夜行バスの利点は新幹線と比較して圧倒的に経済的であることに加え、１日休みを取りさえすれば、その１日は朝早くから夜遅くまで存分に使えるという利点もあります。また、その１日の終わりには私がつくった料理を肴に、２人でひたすら杯を傾けました。これは私にとってのご褒美でもありました。

毎回、夕方５時くらいに飲み始め、バス乗り場に移動しないといけない時間まで、ひたすら話を聴きました。お陰で私は父の生き方というか生き様について随分と詳しくなりました。そのことを昨年の父の日に通信で書きました。今回、添えときますのでお時間があれば付き合っていただけると幸いです。

それなりに穏やかな日々。でも、転機は突然にやってきます。一昨年の末にコロナウイルスに感染し10 日間の隔離入院となったあと、父は自転車を漕ぐどころか歩くことさえできなくなってしまったのです。認知症も一気に進み、とてもじゃないけれど１人では暮らせないという診断を医師からもされました。施設入所を拒む気持ちさえ持てなくなるほど歩行力と同様に認知能力も失われてしまったのです。

私の遠距離介護は第３章に入りました。月に１度帰省し、両親がお世話になっている施設を訪問する、それだけの日々です。身体は随分と楽になりましたが潤いはない日々です。５月 13 日には父が入院しました。軽い脱水状態とのことでしたが、17 日には肺炎を発症。医師から「病状を説明したい」と電話がありました。幸い 21 日から 23 日までは埼玉出張です。23 日の午後に訪問しますと伝えました。

しかし 21 日、東に向かう新幹線の車中で突然に携帯電話が鳴ります。父が入院している病院から。「できれば今日、病状を説明したい」とのこと。私は病院に向かいました。そこで「現在はコロナ患者も入院しているため、すべての患者の面会を禁止していること」、とは言え「遠方から来てもらったので僅かな時間であれば特別に面会を許可すること」そして「父の先は長くないこと」を告げられます。

その後、病床の父と対面させてもらいました。父は酸素マスクをつけていました。「来たよ。わかる？」と話しかけると父は２回頷きます。手を握ると父は私の手を強く握り返しますが呼吸が荒く、あまりにつらそうでした。遠距離介護をしてきた日々が頭の中を巡ります。涙が止まらなくなりました。

翌日、遺体安置所で私は父と２人きりになりました。「なかなか自転車が漕げるようにならない僕を、何度も小学校の校庭で練習させてくれて有り難う」そう言いました。「運動会でしか活躍できない僕のために、いつも応援席の一番前に陣取って大声で応援してくれて有り難う」そう言いました。

「中学校の時ほとんど家に帰らないで遊び歩いていた僕を、見捨てないでいてくれて有り難う」そう言いました。「教員採用試験の前日に不安で喋れなくなった僕に『おまえ１人くらい食わせてやるから、何回落ちたっていいぞ』そう笑ってくれて有り難う」そう言いました。

私の親族は皆、東京在住なのですが「浩ちゃんが来るのを待っていたんだな」口々にそう言ってくれています。偶然とは言え、本当に有り難い出張でした。

五ノ井先生。心配事が１つ減りました。でも、つらいですね。
下村先生。『生き方』だけじゃなく『死にいき方』も学ぶことができました。でも、せつないですね。

遺体安置所からの帰り道の空には朧月。ふとシャツの袖を見るとカフスボタンが片方なくなっていました。前々からお気に入りの銀色のカフス。
「持って行くつもりなんだね、親父」月に向かって、私はそう呟いてみました。
この通信を皆さんが読んでくださる日、いよいよ父の告別式です。

令和５年６月１９日　*vol. 18*

「父の日に思うこと」

高校教育課長
新谷　浩一

○　ささやかな彼の人生

昭和 10 年、彼は東京の下町で建具職人の長男として生まれました。戦争が始まり、広島に疎開すると地元の子ども達のいじめの対象になります。時に肥えだめに嵌められました。バケツに貯めた小便を頭からかけられたこともあります。預かってくれた家庭でもその家の住人と同じ食事は与えられません。でも、不満や愚痴は口にできない日々でした。やがて東京に戻ることになり、原爆が落ちる少し前に広島から離れました。

帰京しましたが戦後の家族揃っての生活は苦しく、昼食時は麦御飯に梅干しが１つの弁当をクラスのみんなから隠れて食べました。遠足に行くお金が家にないことも解っていましたから学校行事のお知らせは親に見せませんでした。そして当日は学校に行く振りをして家を出ると、１日中あてもなく町をふらつきました。

やがて父がアルコール中毒になります。夜まで帰宅しない日には母から「探しにいきなさい」と命じられます。それがたまらなく嫌でした。父はきまってドブの中に倒れ込んで寝ていましたから。びしょ濡れで異臭を放つ父に肩を貸して家まで帰る時、すれ違う人々の刺すような視線にたまらなく惨めな思いをしたものです。

学ぶことが好きで、大学にも行きたいと思いました。でも、働けなくなった父の分まで働く母にそんなことを言い出せるはずもなく、諦めました。商業高校を卒業し、薬品関係の会社で営業職として働き始めました。

やがて好きな人ができました。東京の実家で一緒に暮らすようになりました。子どもができました。（それが僕だ）でも、母との折り合いが悪く、妻は子どもを連れて家を出て行きました。彼はさんざん悩んだ末、母を捨て実家から離れることにしました。親戚からも絶縁された彼は、横浜の社宅に親子３人で暮らし始めました。当たり前のことですが家財道具と呼べるようなものが殆どない部屋でそれは貧しい暮らしぶりでした。

彼はだから必死に働きました。そのためか彼は、気づけば社内でも稀な高卒学歴の部長となり、最期は関連会社の取締役まで任されました。あまりに奔放に育ったため将来を案じていた息子も何とか就職し、手を離れました。そして迎えた還暦。退職の翌月、ホテルの最上階で彼はビールを飲みながら息子に語りかけました。

「浩一。俺は、全部やり終えた気がするよ」彼はそう言いました。「これからは自分のためだけに生きてもいいよな」　息子は黙って頷きました。「農園を借りたんだ。そこで土と戯れながら、人間らしくゆっくり生きてみるよ」　息子は関西で一緒に暮らすことを提案しましたが彼は断りました。「いいよ。俺は老いぼれるまでは自分の足で立って生きるよ。そのかわり立てなくなったら頼むな。俺はおまえに世話してもらいたい」

それから 30 年弱、息子の助けを借りながらも自分の足で何とか生きてきた彼ですが、昨年 12 月、新型コロナウイルスに感染し隔離入院となりました。そのひと月後には１歩たりとも歩けなくなり、そのまま介護施設に入らざるを得なくなりました。発症前日まで自転車を漕いでいた彼の日常生活は突如、奪われたのです。

でも、すべてを運命だと受け容れているかのように彼の表情は穏やかそのものです。それはもしかすると、隔離入院となる２週前、身の回りの世話をするために訪れた息子に既にこう伝えていたからかもしれません。

「世間がおまえを優れた人間と見るか、ろくでもない人間と見るか、そんなことはどうでもいいんだよ。ただ、おまえは俺にとってはよく出来た息子で、そしておまえの中に流れているのは紛れもなく俺の血だ。だから、俺の人生はおまえを残せただけで十分満足なんだな」

彼はもう息子の名前さえ忘れてしまいました。でも、ささやかな彼の人生を息子が忘れることはないのでしょう。その生き様をさんざんに見せつけられているのですから。

家庭、学校、職場、仲間…。実に多くの方に学びながら、僕は日々を過ごしています。